## 2211　離島覚書（宮城県・寒風沢島）

震災前の寒風沢島の集落（上が北集落、中が中集落、下が南集落）
民宿外川に掲げられていた写真を引用

令和４年８月 22 日

**浦戸諸島**

日本三景の一つである松島湾（唐戸島の北西端と七ヶ浜花渕埼を結ぶ線の内側）は大小約 250 の島を抱える多島海だ。このうち人が住む島は桂島、野々島、寒風沢島（さぶさわじま）、朴島の４島だけである。

松島湾は松島町、七ヶ浜町、利府町、塩竈市、東松島市の２市３町にまたがるが、有人４島は全て塩竈市に属している。この４島は 1889（明治 22）年に浦戸村を構成、その後、1950（昭和 25）年に塩竈市に編入された。

４島へは塩竈市営汽船が就航している。使用する船舶は大型船の「しおじ」（64 トン）、小型船の「うらと」「しおね」（何れも 19 トン）の３隻で、乗客数に応じて使い分けている。野々島の浦戸小中学校の児童・生徒や教職員が乗る便は大型船が使われる。航路は塩釜港から桂島、野々島を経て、桂島のもう一つの集落である石浜に寄り、寒風沢島から朴島に至る。朴島から逆コースを辿って塩釜港に戻る。基本的に１日７便だが、火曜日と金曜日のみ第８便が運航されており、朴島と塩釜港を結ぶ直行便になる。なお５時 50 分に塩釜港を出発する第１便は日曜日、祝日、年末年始、盆の期間は運休する。

仙石線の本塩釜駅で下車し、イオンモールを抜け、道路を渡った先に浦戸諸島行の船が出るマリンゲート塩釜がある。駅から歩いて７～８分だ。マリンゲート塩釜は１階が土産物売り場と切符売場、待合室、２階がレストラン、３階がハローワークと研修室が置かれている。この日は高校野球の決勝戦の日で、地元の仙台育英高校が登場しており、待合所のテレビに地元の人々が釘付けになっていた。

15 時 30 分発の市営汽船に乗り、寒風沢島へ向かう。最初の桂島で７人が下船。野々島で

１人下船、石浜で１人乗船、寒風沢島では私を含めて４人が下船した。残った４人の乗客は最終地の朴島に向かった。

港には民宿外川（とかわ）の女将が迎えに出ていた。民宿は船着場の目の前。ちょうど高校野球の決勝戦が大詰にさしかかっており、部屋への案内はそっちのけにされて、居間で女将と仙台育英の試合を観ることになった。仙台育英が優勝してほっとしてから、部屋に案内された。

寒風沢島に来るのは３度目である。最初は震災の２ヶ月前のことで、東北水研の所長をしていた関哲夫、富田（漁村研）、大沢（日本総研）の３氏と離島振興の調査に来たのだった。その後発生した震災の影響でこの調査はうやむやになった。２度目が震災の３年後にあたる 2014 年６月に島旅の一環で被災状況の調査に来た。

マリンゲート塩釜（左）、市営汽船・しおね（右）

**明暗を分けた津波被害**

仙台育英高校の優勝を確認してから、集落と農地を見に外に出る。

寒風沢島は面積 1.21 km$^2$、周囲 13.1 kmで、浦戸諸島の中では最も大きい。集落は島の北西部にかたまっており、野々島との間を隔てる寒風沢水道に面している。

外洋から進行してきた津波は野々島にぶつかり、石浜水道と寒風沢水道を通過して松島湾に入った。ところが寒風沢水道の間は狭いところで 100mほどしかない。このため、津波はここで大きく盛り上がり、水道に面した集落を襲った。

冒頭の写真でわかるように寒風沢の集落は北側の集落と小さな山を挟んだ真ん中の集落、そして南集落の３つに分かれていた。津波は南側から侵入して狭い寒風沢水道で盛り上がったから最も手前の南集落に大きな被害をもたらした。震災前、南集落には 30 軒の住宅があったが、残ったのは５軒だけだった。中集落を含め 33 戸が全壊、21 戸が半壊、被害を免れたのは北集落を中心とする 34 戸だった。ただし被害を免れたと言っても床上浸水している。ちなみに北集落に位置する民宿外川は床上浸水したことから、家をそのままレールに乗せて移動して修繕したそうだ。

震災時、北集落の島民は旧浦戸第一小学校跡、中集落は不動明の祠、南集落は松林寺にそれぞれ避難した。その後３つの集落の人々は小学校跡で避難生活を送ることになる。ちなみに寒風沢島で亡くなった人は３人だけだ。

現在は中集落に１戸、南集落に５戸の家が残るだけで（震災前から建っていた家で、震災後、危険区域に指定されたが強制撤去はされていない）、住宅のあった敷地は空き地になり

草が繁っている。一部はコミュニティ農園になっているが、作物はわずかに作られているにすぎなかった。

震災前の寒風沢島の人口は 168 人（74 戸）であったが、2020 年国勢調査時には 96 人（46 戸）に減少した。また 2022 年 7 月末の住民基本台帳上の人口は 91 人、世帯数は 48 戸となっている。後述する区長さんの話では、現在、実際に寒風沢島に住んでいる人は 43 戸 82 人。この中には後述する地域おこし協力隊とステイ・ステーションの管理人などの４世帯６人の移住者を含むから在来島民は 39 戸 76 人になる。島民の平均年齢は 70 歳になるという。

空き地になった中集落の跡（左）、南集落の跡（右）

## 刺網漁師

防波堤の外で刺網の処理をしている夫婦がいた。土井謙一郎さんといい、1951（昭和 26）年生まれで 71 歳になる。奥さんは２つ下という。土井さんには 2014 年に来た時にもご自宅で会っているので２回目となるが、漁業の話を聞くのは初めてだ。

南集落では 30 軒の家が全壊し、５軒の家が残った。土井さんはそのうちの１軒だった。海水は天井近くまで浸入したが、建てて間もない家だったので流されなかった。自宅の隣の建物で奥さんが理容業を営んでおり、こちらの建物も無事だった。被災した家の２階に寝泊まりし、食事は理容室のあった建物でつくり、時間をかけて１階部分を片付けたという。震災後は避難所にいたが、半年後の９月に家に戻り、かたづけに着手した。

土井さんは島の中学校を卒業してから、結婚するまでの 10 年間、親と一緒にノリ養殖を営んだ。結婚後、本土側に働きに行く。寒風沢島の人たちの仕事は、ノリ養殖、カキ養殖、本土への勤め人の３つに大別されたらしい。

当時、景気がよかったので残業は当たり前だったが、島に戻る船便の時間は限られているから結局残業はできない。しかもこの時代は高校に進学するのが一般的になっていたので中卒は嫌われたという。そこで自活できる道を選び、２種免許をとって長いことタクシーの運転手をしていたそうだ。しかし島で生まれ、海に親しんでいた土井さんは海の仕事が性に合っているようで、タクシーをやめて奥さんと一緒に刺網を営むようになった。

刺網は５トン前後の漁船を用い、仙台湾で操業する漁師が５経営体いるが、船外機により島のまわりで小規模な刺網を営み、かつ出荷している漁師は彼１人だけだ。土井さんのような刺網を営む漁業者はけっこういるが、何れも「賄用」で出荷はしていない。

土井さんは１反 30 間の網を３反分つないだ刺網（全長 150mほど）を夜中に入れて、２時間ほど経ってから引き揚げ、港に戻る。漁獲物はマコガレイやヒラメがメインである。刺

網は大量の浮遊物が絡むので、これを除去し、翌日、設置できるようにするにはけっこう手間がかかる。９時をすぎて、ようやく刺網の整理が終わる。準備した刺網は、夜、再び設置するというパターンが繰り返される。

土井さんは漁獲物を七ヶ浜の魚市場に出荷している。

刺網の整理をする土井さん夫婦（左）、準備を終えた刺網と使用する漁船（右）

### 災害公営住宅

南地区の背後の高台に「防災集団移転促進事業」による災害公営住宅が建つ。松林寺の脇にあった湿地を６ｍほど嵩上げした土地である。震災後３年目に来た時は造成中だった。島には文化財が多く、高台移転の候補地がないため、使われていない湿地を埋め立てることになったようだ。嵩上げ用の土砂は七ヶ浜町から運んだ。

この造成地には自主再建用の戸建用地が３区画分あり、ここに２軒の家が建っていたが、残りの１区画は空き地のままだった。自主再建用地は危険区域に指定された土地 130 坪に対して 80 坪の土地が与えられたらしい。

賃貸住宅は 2015（平成 27）年 10 月に完成している。木造平屋建ての戸建住宅が６棟、木造平屋の長屋が１棟（５世帯分）の合計 11 世帯分である。それに集会所が別に１棟建つ。また世帯ごとに建物の外に倉庫が置かれている。間取りは戸建てが３ＤＫ、長屋が２ＤＫである。長屋には後述する地域おこし協力隊で島にやってきて、その後刺網漁師となった夫婦が入居している。

道路脇にはわずかばかりの菜園があり、花や野菜が植えられていた。

災害復興市営住宅（左）、同じく区画内に建つ自主再建住宅（右）

**ヨシ原へ変貌した田んぼ**

災害公営住宅から六地蔵の置かれている辻を抜け、旧小学校跡の前の道を下ると広大な平地が拡がる。震災３年後に来た時には一面田んぼだったが、驚いたことに手前の僅かな土地を除くと全てヨシ原に変わっていた。

手前の田の脇では長南（ちょうなん）友宏さんが生い茂ったヨシを刈り、スズメを追い払うための烏に似せた「スズメ除け」をつくっていた。以前は大部分の田で米がつくられていたので、スズメが特定の田に集中することはなかったが、長南さんの田んぼ以外はヨシ原に変わったためスズメに集中的に襲われるようになったらしい。

寒風沢島で現在米を作っているのは、長南さんと民宿外川の２軒だけになってしまったという。作付面積は、長南さんが３反強、外川さんが４反ほどだ。外川さんの田はかなり離れた前浜の先にあり、こちらはガス鉄砲が設置されていて定期的に爆音を発するのでスズメは逃げるが、長南さんのところはこうした対応をしていないので被害がよけいひどいらしい。

２人が栽培しているのは宮城県特産のササニシキである。なお、長南さんは外川さんと同様、震災前までノリを養殖していたが、津波で加工場がだめになり、廃業した。現在は米づくりの他に島内のゴミの収集とカキ養殖のアルバイトをしている。

塩釜市内で米を作っているのは寒風沢島だけである。川もダムも溜池もないので天水に依存している。かつては 27 町歩の田があったらしい。しかし島民の減少と高齢化が進み、耕作放棄地が広がった。こうした事態を憂慮したＮＰＯ法人浦戸アイランド倶楽部が 2009 年に一部の田を借りて田植体験の活動を始めたが、2011 年３月の大震災で津波が田を襲い、海水が浸入した。その後、ＮＰＯが中心となって田を再生し、2012 年から比較的大規模な米づくりが始まった。ＮＰＯが関与した耕作面積は５町歩ほどに及んだという。「浦霞」のブランドで知られる日本酒の醸造元・㈱佐浦も協力し、酒米としてササニシキを買い上げるとともに、この原料を使った日本酒を「寒風沢」のブランドで販売、また農機具も提供していた。

しかしＮＰＯのこうした活動は補助金に大きく依存していたため、震災後５年で補助金が途絶すると、経営がうまくいかなくなり 2016 年には米づくりをやめてしまった。それから６年が経ち、田んぼはほぼ一面ヨシ原に変わってしまったのである。

長南さんの田んぼ（左）、一面ヨシ原になってしまったかつての田んぼ（右）

こうした事態を憂える人も出てきて、外川さんによると、塩竈市議の今野恭一さんが島の

土地を購入して米づくりを始めるそうだし、後述する島津区長によると仙台市にある農業法人㈱みらい福祉農園も関心をもっているとのことだった。しかしヨシ原を田に復元するのは大変な作業になり、資金も必要だ。果たして経済的に持続可能なのか、千葉県房総半島の大山千枚田や石川県輪島の千枚田のような新しい仕組みを考えることが必要だろう。

**地域おこし協力隊**

外川さんの田を見ようと、島の南に向かったがよくわからず、日が暮れそうになったので民宿に戻ることにした。途中、震災時は避難所、その後、仮設住宅が置かれていた旧小学校跡を見に行った。現在は寒風沢ステイ・ステーションとして使われている。旧校舎に明かりが灯っていたので顔を出すと若い男性がパソコンに向かっていた。

彼は加藤信助さんといい、塩竈市内の本土側からやってきた。父親が寒風沢島の出身だそうだ。2012 年１月から上述したＮＰＯ法人浦戸アイランド倶楽部のスタッフとして米作りに携わっていたが、ＮＰＯは解散。しかし農業がしたくて５年前から寒風沢島に移住し、就農する。現在は外川さんのところでワカメ養殖と農業を手伝いながら、このステイ・ステーションで夜勤の仕事をしているという。

寒風沢ステイ・ステーションは地域おこし協力隊員の宿舎になっている。地域おこし協力隊は過疎や高齢化が著しい地域に都市部から人を送り、地域への協力活動を行いながら、その地域への定住、定着を図る総務省の取組みで、2009（平成 21）年度からスタートした。最長３年間、地方自治体から給与が出る。塩竈市は浦戸諸島の伝統的な漁業や養殖業が後継者難から危機的な状況に置かれているとの認識に立ち、将来の漁業後継者や島づくりの担い手を地域おこし協力隊員として広く募集してきた。

寒風沢島にはこれまでに３人の隊員が来た。このうちの先輩格の青野さんは３年間の隊員生活を経て、一昨年独立し、刺網に従事している。師匠だった漁師が引退したため漁船等をそっくり引き継いだ。青野さんは既婚者で、供述した災害公営住宅の長屋に住んでいる。もう一人は鎌田さん（38 歳）といい、来年２月で３年間が経つので漁協の資格審査を経て組合員になる予定で同じく刺網に従事している。鎌田さんも既婚者で、北集落の空き家に住んでいる。もう一人が昨年新しく入った人で大泉さんといい、35～36 歳になる。こちらは朴島で種ガキ生産の修行中だ。大泉さんは独身で、このステイ・ステーションで自炊生活をしている。

地域おこし協力隊が生活する寒風沢ステイ・ステーション（左）、管理人の加藤信助さん（右）

**民宿外川**

加藤信助さんに話を聞き、民宿外川に戻る。入浴後、民宿の旦那さんと一緒に居間で夕食を食べる。この日のメニューは、アイナメ、アワビ、タコ、ツブ、白魚、ウニの刺身とヒラメの煮つけ、ガザミのボイル、穴子白焼き、穴子天麩羅であった。缶ビールを２本飲んだ。提供された魚介類は全て旦那さんが獲ってきたものである。

寒風沢島の宿泊施設は震災前には６軒あったが、現在は民宿外川（外川晴信氏）と民宿潮陽館の２軒だけになっている。

潮陽館には 2014 年に来た時に泊まっている。ご主人が亡くなられて間もない時期で女将さんが１人で営業していた。現在はおそらく高齢化していると思われたため、今回は外川を選んだのだった。

民宿外川の先代は千葉県の外川（銚子市）から来たらしい。震災前はノリ養殖と民宿を営んでいたが、ノリの加工場が損壊。復旧には多額の資金を要することから再建を断念し、ワカメ養殖に転換している。この他に刺網と潜水（アワビ、ウニを対象）の漁業を営み、上述したように米も作り、民宿との複合経営を行っている。出荷しているのはワカメ（生出荷）と米の一部（㈱佐浦に酒米として販売）で、魚介類と、米、野菜類は民宿の食材として自給しているわけだ。なお、翌日の朝食にはウミタナゴの刺身、昼食にはアオコ（ブリ幼魚の地方名）のフライ、イシモチの塩焼き、ツブのボイルがでた。

客は私１人だったから３つの部屋をぶち抜いた広間で寝た。

娘さんが３人いるが、何れも島外に嫁いでおり、後継者はいない。ご夫婦は古希を迎えているので、島の宿泊施設の将来が思いやられる。

民宿・外川の外観（左）、早朝、刺網の処理をする外川夫妻（右）

**令和４年８月 23 日**

**カキ養殖**

民宿のご主人が刺網を揚げて、漁港に戻ってきた。早朝、女将が網外しを手伝いに行くというので、一緒に漁港に行った。漁獲物はイシモチとツブ、シタビラメなどがメインで、プラスチック籠に１杯ほどの量だった。しかし虫（等脚類等？）に食われている魚が多く、食害を受けた魚はネコの餌として持ち帰った。

集落の東側は広い埋立地となっており、岸壁には５隻の刺網漁船が係留されていた。しかし、今年３月に発生した地震で護岸が前のめりになっており、至る所に亀裂が発生し危険な

状態である。

ちょうどそこにカキ養殖と種ガキ生産を兼業している鈴木さん（72 歳）の船が入ってきた。漁船には手伝いの若い男性が乗っていた。彼は松島の観光船・丸文松島汽船㈱に勤めており、この日は会社が休みで、人手不足の鈴木さんの手伝いにきたのであった。

寒風沢島でカキ養殖を営むのは鈴木さんを含めて２経営体である。両経営体は養殖用の種ガキの生産も兼業している。

寒風沢水道に面した漁港用地にカキの共同処理場が置かれていた。ここでは寒風沢島の両経営体と朴島でカキ養殖を営む２経営体（川畑兄弟）の合計４経営体がカキのむき身処理を行っている。

宿に戻って朝食を食べ、隣の漁協事務所に出かけた。

カキの共同処理場（左）、カキ養殖の船（右）

**県漁協浦戸東支所**

宮城県漁協浦戸東支所は寒風沢島と隣の朴島の漁業者で組織されている。事務所が８時 30 分に開くというので、同時刻に訪問し、早速、内海支所長に話を聞く。

浦戸東支所は正 16 人、准 23 人の合計 39 人である。震災前はそれぞれ 29 人、30 人の合計 59 人だったので、この間に 20 人減少した。特に正組合員の減少が顕著で、すでに単独では漁協として成り立たない状態になっている。なお朴島に３人の正組合員がいるので、寒風沢島に限れば正組合員は 13 人だ。

浦戸支所で営まれている養殖業はカキ養殖、ワカメ養殖、種ガキ生産で、漁業は刺網、潜水、籠、採貝などである。

震災前までは、４経営体がノリ養殖を営んでいた。しかし加工場が被災し、その再建には多額の投資が必要なことから全員が再建を断念した。４経営体のうち２経営体がワカメ養殖に転換している。生産したワカメは自ら加工せず、生で加工業者に販売している。

カキ養殖は４経営体が営み、島別の内訳は寒風沢島２、朴島２である。震災前は８経営体が営んでいた。2014 年に訪れた時には６経営体（寒風沢島３、朴島３）に減少していたから、その後さらに２経営体が減少したことになる。寒風沢島のカキ処理場は県内で最初に復旧していたから震災の年からすぐに活用され、2011 年 6.5 トン（むき身）、2012 年 8.6 トン、2013 年 16.5 トンと順調に回復していた。その後、年による変動がみられるが、2016 年には 34.9 トンとピークを迎えた。しかし経営体が減少しつづけたことから、支所全体とし

ての生産量は減少に転じている。ただ、１経営体当たりの生産量はむしろ増えている。これは経営体あたりの行使する養殖施設数を６台から９台に増やしたことによる。なお、寒風沢島では西日本のカキ養殖産地のように外国人のむき子を入れていないので、むき子不足と高齢化は否めず、むき子の確保がカキの養殖生産を左右する事態となっている。

種ガキ生産は、震災前 11 経営体が営んでいたが、震災後 10 に、現在は６経営体に減っている。高齢化が原因でやめていった。垂下用の竹を数年に１回更新しなければならず、これが重労働になっているためだ。このうち２経営体が専業、４経営体がカキ養殖との兼業である。専業の２経営体は朴島を拠点としており、うち１経営体（内海さん）は寒風沢島に居住している。なお種ガキの販売に支所は関与していないので生産数量はわからないとのこと。

刺網は５トン前後の大型船が５隻、船外機によるものが１隻（上述した土井さん）である。2016 年調査時には大型船は６隻だったので、この間に１隻が廃業している。５隻のうち１隻は地域おこし協力隊で修行した人が廃業した船を受け継いでいるので、実際の廃業隻数は２隻ということになる。大型船は仙台湾で周年操業、船外機は島の周りで周年操業している。前者は塩釜魚市場、後者は七ヶ浜の魚市場にそれぞれ鮮魚で出荷している。なお賄用で刺網を営む漁業者は民宿外川を含めてたくさんおり、ほとんどの組合員が営むようだ。

震災直後は操業する船が大幅に減っていたことから、刺網の漁獲は船が沈むほど豊漁で、水揚金額は震災前の 1.5 倍の 2,000 万円ほどだった。しかし、次第に他地区の漁船が漁業を再開したことから、競争が激化、また新型コロナウイルスの影響で単価が下がったこともあり、現在の水揚金額は１隻あたり平均 1,000 万円ほどだ（エチゼンクラゲが増えて漁獲量が低下した 2006～2007 年ごろを若干上回る程度）。刺網の主たる漁獲物であるカレイ・ヒラメ類は秋から漁獲量が低下するため、秋以降は資源が増えているガザミの漁獲へとシフトするという。

**宮城県漁協浦戸東支所の建物（左）、同漁協研修センター（右）**

タコの漁期は９月から３月まで、籠で採取する。島ではほとんどの人が営む。

ウニは 2014（平成 26）年度から獲っていない。またアワビも昨年、一昨年の両年は獲らなかった。コロナの影響で価格が低下したことが影響している。今年は３年ぶりに２経営体が操業、そのうちの１人が外川さんである。なお、ウニは自家用として一部の組合員が獲っているようだ。

アサリの漁獲も少なくなっており、賄向けに採る人がいる程度だ。最近、エイが目立ってきており、アサリが食害を受けている可能性があるという。

## 長南和泉守と寒風沢港開発

後述する島津区長によると、寒風沢島の古い集落はその名の通り島の南東部の元屋敷浜にあったという。大津波で被災し、集落を放棄して現在の場所に移住したらしい。寒風沢島逸話（３）の略年表では「永禄２年（1559）に大津波があり、70 余戸流失」とあるが、この時のことかどうかはわからない。

寒風沢島が歴史に登場するのは 1616（元和２）年のことだった。この年の３月に安房里見氏に仕えていた長南和泉守（ちょうなんいずみのかみ）菅原道本（みちもと）が上総国興津（現千葉県勝浦市）から逃げ延びてきて、寒風沢港を開発したのであった。

和泉守が仕えていた安房里見家は、里見義康の時代に 1600（慶長５）年の関ヶ原の戦いの論功行賞によって常陸国鹿島の３万石を加増されて 12 万２千石の大名になっていた。しかし 1614（慶長 19）年にその子息の里見忠義は大久保忠隣（ただちか）の改易事件に連座し、安房国を没収され没落する。和泉守は里見家から１万２千石を与えられた船奉行であったが浪人となった。1615（慶長 20）年の大坂夏の陣の際には豊臣秀頼方に加担しようとしたが豊臣方が敗れたため、和泉守は数隻の船を奪取して伊達藩の飛び地である常陸国信太郡青宿を経て、寒風沢島に逃げ延びてきたのである。30 数人の手勢であった。

和泉守は隣の野々島から船で通いながら、寒風沢島の集落が形成されている現在の土地を造成し、港をつくった。そして武士をやめ、得意の船を使って海運業を始めたのである。第５代清八郎の時から江戸幕府の御城米浦役人に任命され、名字帯刀を許される家柄となった。和泉守によって拓かれた寒風沢島はその後大いに発展することになった。

河村瑞賢は寛文年間（1661～1673 年）に福島県北部の天領の年貢米（御城米）を江戸に運ぶため、阿武隈川を川下りして河口の荒浜港（現亘理町）に運び、そこから廻船（御城米船）が太平洋岸を南下して江戸に入る東回り航路を整備した。しかし荒浜は水深が浅く大型船の出入りが難しい港であった。これに対し、太平洋に近く、水深があり強風の影響を受けにくい寒風沢港が江戸に向かう廻船の拠点港として注目されることになる。かくして寒風沢港は御城米をおさめる蔵、荷の積み込み業務を行う御蔵方役の家などが置かれ、旗本や御家人が下役を伴って交代で常駐した。さらに仙台藩もいったん米を寒風沢港に集結させ、ここから江戸に積みだしたので、船や貨物を監視統制する藩の役所も置かれた。廻船の入港が増えると、寒風沢港には廻船問屋や宿屋、遊郭などもできて大いに繁栄したのである。

しかし明治時代に入り、白石廣蔵が桂島の石浜に白石商会を設立し、汽船による海運業や遠洋漁業、ラッコ漁などを大規模に行うようになると、近代港としての役割は石浜に移行し、寒風沢港は徐々に衰退していった。

長南和泉守の長南家代々の墓

## 日和山展望台から前浜へ

漁協で話を聞いてから南集落の先の日和山に向かう。防波堤の高さは南に行くほど高く

なり、３mほどになった。江戸時代にはこの山の下に御城米の倉庫や御番所などがあったとされる。

現在、その位置には開成丸の造艦の碑と従軍碑２基、湯殿山、巳侍(みまち)供養塔の５つの石碑が並んでいた。開成丸は江戸から造船技師・三浦乾也(けんや)を招聘し、安政３（1856）年８月から翌年７月までの１年間をかけてこの地で作った東北で初めて造られた西洋型軍艦である。船の長さは 110 尺（33.3m）であった。石碑は三浦乾也の弟子たちによって建てられた。造船場は南集落の外れにあったことから、島民からは南工場と呼ばれていた。平屋建ての大きな建物で、屋根は杉皮葺き、屋根が飛ばされないように重い石が並べられていた。この建物は大正末期まで残っていたそうで、造船場からコークス工場、海藻からヨードをとる工場へと変遷したようだ。

軍艦といえば、戊辰戦争中の 1866（慶応４）年に、江戸を脱出し函館の五稜郭に籠もった榎本武揚率いる幕府艦隊が寒風沢島に入港し、１ヶ月半ほど滞在、将兵 3000 余人が周辺の島に分宿した。この際、寒風沢の米蔵から食料が供出されたという。

もう一つ船にからむ逸話は日本人として初めて世界一周を果たした人物が寒風沢島の出身だったことである。江戸向けに仙台藩の米と木材を積んだ「若宮丸」という千石船が 1793（寛政５）年 11 月に石巻港を出港した後、塩屋岬沖で悪天候に遭って操船不能となって漂流、翌年５月にロシア領のアリューシャン列島の小島に漂着した。この船には寒風沢島出身の津太夫と佐平他 16 人が乗り組んでいた。船頭の平兵衛は病死するが、残る 15 人はその後シベリアのイルクーツクに送られ、ここで７年間滞在、この間に２名が死亡した。1803 年３月、ロシア皇帝アレクサンドル１世から首都ペテルスブルグに呼び出されて謁見、帰国の意思を問われて津太夫と左平他２人は帰国を希望した。ロシア残留を希望する６名を除く津太夫ら４名は、世界周航をめざすクルーゼンシュテルン提督の船に乗り込み、ペテルスブルグから大西洋を横断し、マゼラン海峡、ハワイ、カムチャッカを経て 1804 年９月に長崎に到着した。その後、幕府の取り調べを経て仙台藩に引き渡され、1806 年２月に 12 年３ヶ月ぶりに帰郷を果たしたのだった。

以上のように今では過疎と高齢化の寒村となってしまった寒風沢島だが、江戸時代は日本の先端を行く土地だったのである。

集落の行き止まりまで行くと、下水処理場が置かれていた。やぶ蚊の多い山道を５分ほど登り、日和山に立つ。帆船時代に日和を見た小山で、頂上の狭い広場には十二支方角石やしばり地蔵（遊女が船出しようとする男たちを引き留めようとお地蔵様を荒縄で縛り、逆風を祈願した）などが置かれている。

島の西海岸は断崖絶壁が続くが、その上の山道を歩き、引き続き砲台跡を訪ねた。仙台藩は、1867（慶応３）年に海防上最も重要な石浜水道に面するこの位置に砲台を築いた。カノン砲３門を備え、弾薬庫、見張所を備えていた。また沖に見える船入島には鉄の大巨砲２門、さらに石浜崎に１門が据えられていた。藩から大砲方 50 人余が松林庵に駐屯して警備にあたっていたといわれている。

山道はうす暗く、アブが多い。帽子でアブを払いながら進む。またサワグルミが多数落ちていた。だれも拾わないようだ。しばらく進み、山道を右折して海の方に向かうと寒風沢神明神社にでた。ここから弓なり状の前浜を一望できる。坂を下って前浜に出る。前浜の背後

には防波堤がつくられている。付近に家庭菜園があった。

日和山展望台（左）、前浜（右）

**区長**

民宿外川の田は前浜の近くにあると聞いていたので、探したが見つからない。今やヨシ原と化した一帯を歩き、島の最北端の韮浜や西側の元屋敷浜を見て、集落に戻ろうとすると軽トラック２台と 10 人ほどの男女の集団が農地中央の道を歩いてきた。

軽トラックの主が「何をしている」と尋問してきた。昨日から見知らぬ人が島を歩き回っているという情報が入っていたようだ。旅の主旨を話し、軽トラに乗せてもらってこの集団と行動を共にすることにした。軽トラの主は島津功区長さんといって寒風沢島の区長であった。昭和 15 年生まれで 82 歳になるというが、若く矍鑠（かくしゃく）としていて、頭脳も明晰だ。種ガキ生産、ノリ養殖、カキ養殖などを手掛けてきたが、現在は引退している。戦後すぐに種ガキはアメリカに輸出されたという。

一行は宮城県の関係者でヨシ原に変貌してしまった農地の現状を調査しに来たのだそうだ。ドローンを操る人もいて、水田跡をくまなく歩いていた。区長さんは軽トラの荷台に乗るように勧めても法律違反になることから県職員は頑なに炎天下を歩いていた。私の方はちゃっかりと助手席に乗せてもらい、区長さんから島の様子を聞いた。

一行は外川さんが耕作する田んぼを見に行ったので、結局、私も見ることができた。区長さんによると、この一帯は昔から田んぼだったそうだ。寒風沢島は海運業で栄えたので艀を持つ人が多かったが、塩釜港が整備されると失業し、他の島に移住した。この人達が所有していた田は他の島の人に所有権が移ったという。1960（昭和 35）年のチリ津波で大きな被害を受け、これを契機に土地改良事業が実施されて、農地は現在のような碁盤の目状の田に変わったそうだ。

島には松林が多く、秋には松茸がたくさん採れたという。松林の松葉は炊飯の燃料としてかき集められ、常に手入れが行き届いていたが、プロパンガスに変わってから松林は荒れ、松茸は採れなくなった。貧しくも豊かな生活が島にはあったと区長はいう。

最後に、区長さんが耕作していた田を訪れた。6 反ほどの土地で米をつくっていたそうだが、今はすっかりヨシ原に変わっていた。息子たちに後を継げとは言えなかったという。

長南家の墓及び寒風沢島の人々の墓を見て、歩いて民宿に戻る。島には食堂がないから、県の関係者も民宿外川で昼食を食べることになっており、一緒だった。食事の場所は別で、私は居間で食べる。10 人もの客がきたものだから、娘さんが朝から手伝いに来ていた。